

干上がった川が教えてくれたこと

山添村立山添中学校三年

栗林 瑠采

「節水にご協力下さい。」夕暮れの山添村に響く、防災無線の声が、今年は例年になく重く感じられます。私の住む山添村は、たくさんの緑に囲まれ、近くには大きなダムもあります。これまでは、蛇口をひねれば当たり前のように透き通った水が出てくる生活に、どこか安心していました。しかし、今年の水不足は、私にとって「他人事」ではない事実を突きつけるものとなりました。

私の家は田んぼや畑をやっていないので、正直なところ最初はピンときいていませんでした。ところが先日、両親と一緒に近所にあるダムや川を見に行つて思わず言葉を失いました。そこにあつたのは、今まで見たことのないような光景だったからです。いつもなら水をたつぷり蓄えていたはずのダムは、底の地面が見えるほどなくなっていました。川の流れも細く途切れ

ていて、水が溜まっている場所がほとんどありません。テレビのニュースで見る、遠い国の話ではなく、自分の通学路の近くでこんなことが起きているなんて信じられない気持ちでいっぱいになりました。真っ先に浮かんだのは、そこに住んでいた生き物たちのことです。川にはいつも魚や亀がいて、当たり前のように泳いでいました。でも水がなくなってしまうって、生き物たちは、どこに行ってしまったのか。干上がった川底に取り残されて、苦しい思いをしてはいないかを考えると胸が締めつけられるように痛くなりました。私たちが生きていくために水が必要なように、小さな生き物たちにとっても、あの川はかけがえのない「家」だったはずです。私たちの生活を支える水は、同時に生命の拠り所でもあるのだと、目の前の乾いた景色を見て改めて強く思いました。

中学三年生になる私にできる節水とは何があるだろうか。去年の私は、手洗いやシャワーのときに水を止めたり、環境にやさしい洗剤を

家族と選んだりといった、家庭でできる基本的なことを挙げました。こうした日々の積み重ねは今年も続けていくつもりです。無駄な一滴を出さない意識を家族みんなで持ち続けたいと思います。

しかし、今年の光景を見た私は、もう一步踏み込んで考えなければと思うようになりました。まずは、「水の循環」をこれまで以上に意識した生活を送ることです。家庭で使った水は、排水溝を通ってやがてあの川へと帰っていきます。川の水がこれほど少なくなっている今、私たちが流す汚水の成分は普段よりも濃くなっている。生きていくためにダメージを与えてしまうはずなんです。お皿を洗う前に紙で拭き取る、食べ残しのスープをそのまま流さないといった、川に住む生き物たちの家を汚さないための配慮をこれまで以上に徹底したいです。

水はときには怖い災害を引き起こすこともあります。今回のように「なくなること」もまた、私たちの命や自然を脅かす大きな災害の

一つなのだと学びました。世界に目を向ければ、安全な飲み水すら手に入らず、亡くなってしまう小さな赤ちゃんや子どもたちがたくさんいる国もあります。山添村で起きている現象は、地球全体で起きている大きな問題の一つのサインなのかもしれません。自分たちの地域がいのではなく、世界全体のことを考えながら生活していくことが、これからの私たちに求められているのだと思います。この先を生きていく人々のためにも、今を生きている私たちができることはたくさんあります。この美しい山添村の水を、そして豊かな生態系を次の世代へ繋いでいくために、まずは今日、目の前の一滴を大切にすることから、私の新しい挑戦を始めていきたいと思います。